【彙報】

短信－研究室から

◎『四谷塩町一丁目人別書上』下巻、刊行

平成10年3月の上巻刊行に引き続き、江戸東京博物館史料叢書2冊として『四谷塩町一丁目人別書上』下巻が刊行された。この史料は、当館が平成2・3年度に収蔵した、元東京大学法学部教授、石井良助氏収集文書（石井コレクション）の一部である。近世から明治初年にかけての、江戸東京における住民構成を知りうる史料としては、十数か町分、20数点の人別書上類や戸籍の存在が知られているが、現在の段階では、当館所蔵のこの人別書上が最も多年次にわたるまとまった史料群として貴重な存在といえよう。今後多くの研究者によって、この史料集が活用され、研究の進展に寄与できれば幸いである。

なお、巻末には、当館の研究員である林玲子による解題を付した。

◎第2回「江戸東京博物館シンポジウム」開催される

平成11年1月16日、江戸東京博物館シンポジウムが開催され、113名の参加者があった。平成9年に行った第1回に引き続き、今回は「江戸東京における首都機能の集中」をテーマに、郡山女子大学教授・川添登氏と国際日本文化研究センター教授・園田英弘氏をパネリストに迎えた。当館都市歴史研究室長・北原進の基調報告ののち、川添氏より「現代は絶対王朝の首都江戸にはじまる」と題する報告を得た。氏はこのなかで、現代的基準から見ると、江戸は実質的な「首都」として機能していたことを明らかにした。これに続く園田氏の報告「東京は首都か？－ミヤコ論の視点から－」では、江戸が実質的に首都機能を備えていたことを認めつつ、古来より日本人の心情に根ざしていた「ミヤコ」という観念が、明治維新を契機に生まれた新しい「首都」東京にどのように重ねられていったのか、という大胆な問題提起を得た。各パネリストの報告後、会場を含め活発な意見交換がなされたが、そうした討論を通して、現代においても「首都とは？」という問いに対し明確な回答が用意されていない現状が浮き彫りとなり、依然として大きな問題であることを再認識させられた感があった。

なお、都市歴史研究室では、このシンポジウムの報告書の刊行にむけ、現在編集作業をすすめているところである。

編集後記

『研究報告』も号を重ね、これで4号めの刊行となりました。既刊号をお読みいただいた皆様の中には、今号の誌面構成が従来と少しばかり違うことに、お気づきの方もいらっしゃるかと思います。大胆な誌面刷新！にはほど遠いですが、特集を設けるなど、新しい試みを模索しつつの編集作業となりました。活動が活発化しつつある研究グループの成果も、今回初めて論考として公表することができました。今後、こうした館員による研究活動がより発展し、学際的テーマを設けての特集号など、『研究報告』の誌面がさらに充実することを願ってやみません。まだまだ発展途上にあるこの『研究報告』です。率直な批判・論評をお寄せいただけたら幸いです。(N)

本書に掲載された論考・資料紹介で、引用資料中の用語の中に現在では不適切な表現と思われるものがありますが、あくまで学術上の用語として原典のまま掲載したものであることをお断りいたします。

江戸東京博物館史料叢書1・2
四谷塩町一丁目人別書上（上）（下）
B5判　二五〇〇円（上）　二〇〇〇円（下）
四谷塩町一丁目（現新宿区）の人別帳の内、安政四年、文久元年、文久二年、文久三年の四年分を上巻に、元治元年、慶応二年、明治二年、明治三年の四年分を下巻に収める。現存する江戸町方の人別は極めて少なく、ひとつの町にこれほどの人別帳が残されている例は皆無である。幕末維新期の町の変化を克明に綴る貴重な史料。

江戸東京博物館シンポジウム報告書1
明治維新期を都市民はどう生きたか
―江戸東京学の現状と課題―
B6判　六〇〇円
問題提起／小木新造、松平誠、宮田登、竹内誠、石塚裕道他
パネリスト／牛米努、北原糸子、初田亨

江戸東京博物館調査報告書
●ヤミ市模型の調査と展示　―新宿東口ヤミ市の調査報告書―
A4判　二〇〇〇円
●今戸焼　―江戸在地系土器である今戸焼及び瓦製造道具の調査報告書―
A4判　一三〇〇円

〒130-0015
東京都墨田区横網一―四―一
東京都江戸東京博物館都市歴史研究室
TEL　〇三―三六二六―九九一八（直通）
FAX　〇三―三六二六―八〇〇二
※価格は税込。但し、郵送希望の場合の送料は別途。

EDO-TOKYO MUSEUM　江戸東京博物館